歴史を歩く㉖

『戦国時代の群像 ～第十一話　肝付兼続の出撃』

弘治2年（1556年）の飫肥の島津忠親（豊州島津家第5代当主）による竜相城総攻撃は、竜相城を落とすことができぬまま永禄元年（1558年）3月19日に、兵を引き上げることになった。戦ヶ島の合戦で肝付方は竜相城主 薬丸弾正兼持の戦死という大きな損失を受けたが、結果的に海上交通の要所である大崎の地を守り抜いたわけである。

しかし、これで戦いはおわったわけではない。島津忠親軍が兵を引くと同時に肝付兼続は攻撃に転じたのである。兼続は北に兵を向け、都城領主北郷時久を攻めた。

北郷時久は、島津忠親の実の子である。かつて忠親は朋友である豊州島津家の存続のため、子の時久に北郷家の家督を譲って、自ら豊州島津家の養子となり、その家督を引き継いで第5代目の当主となっていた。当然ながら戦ヶ島の合戦における忠親軍には、北郷軍も加わっていたと考えられる。

肝付兼続の出撃を知ると、北郷時久もまた自ら軍を率いて南下し、父島津忠親も援軍を遣わした。そして恒吉宮ヶ原（曽於市大隅町）が、肝付兼続と北郷時久との戦いの舞台となった。永禄元年（1558年）3月19日のことである。

激戦の末、北郷軍は時久の叔父北郷久厦を始め、忠親の援軍の武将が戦死し、敗北を喫した。北郷軍を打ち破った肝付兼続は、続いて同年10月23日に島津忠親の所領である志布志に攻め込んだものの、落とすことができず、一旦兼続は兵を引き上げた。

永禄2年（1559年）4月14日に兼続は、忠親の属城である松山城城主平山忠智を襲撃し、殺害すると、そのまま松山城を攻め、平山忠智の子久武・久次を討って松山城を占拠した。

肝付兼続の攻撃は止むことなく続いた。兼続は永禄3年（1560年）3月に日向の伊東義祐と申し合わせて、義祐が飫肥に、兼続が志布志に攻め入って、島津忠親を挟み打つ作戦に出た。

これに窮した忠親は、島津本家第15代当主島津貴久に使いを出して救援を求めた。

貴久は次男である忠平を飫肥救援に向かわせ、同年3月19日に忠平は忠親の養子になって飫肥城に入った。忠平はこの時わずか24歳であったが、天文23年（1554年）の岩剣城の合戦（姶良市姶良町）で初陣を飾り、弘治3年（1557年）の蒲生城攻めでは、5本の矢を受けるという重傷を負いながらも、敵の首級を挙げるという、将としての頭角を表していた。この島津忠平こそ、後の島津義弘で、関ヶ原の合戦の決死の敵中突破「島津の退き口」で、全国に名を轟かせることになる。

忠平の援軍によって攻略が困難になってしまい、伊東義祐と肝付兼続は、軍の撤退をせざるを得なくなった。

ところで、『西藩野史』では、永禄三年（1560年）庚申の条に以下のような内容の記録が記されている。

肝付兼続が鹿児島に来て、島津貴久を旅宿に招いて宴会を開いた。その宴会の最中に、貴久の重臣であった伊集院忠朗が薬丸何某（薬丸兼将と推測されている。）に向かって、「今日のご馳走は誠においしい。しかしながら、鶴の吸い物が無いのは残念。」と冗談を言った。鶴は肝付氏の家紋である。これに対して薬丸兼将は「もう一度宴会を開くのなら、島津家から狐一匹は振舞ってください。」と皮肉を返した。狐は島津氏にとって守り神である。侮辱を受けたと捉えた忠朗は激怒して刀を抜いて、肝付家の帷幕を斬った。この時幕に描かれた肝付家の家紋である鶴の図柄を断ち切ってしまったのである。これを不吉の予兆と嘆き、悲しんだ肝付兼続らは高山に帰って、島津本家との戦の準備を始めた。

▲肝付家家紋
『追い鶴食若松／三つ雁金』

この話は後世の創作とも言われているが、いずれにせよ永禄初頭（1560年頃）には、肝付兼続・良兼親子と島津貴久との戦いはすでに避けられないものとなっていたと考えられる。薩摩・大隅・日向の三州統一を目指す島津氏と、大隅半島の覇権を確立させたい肝付氏が対立するのは当然の流れであり、特に日向伊東氏と手を結び、豊州島津氏と北郷氏の対立を深める肝付氏は、島津貴久にとって脅威の存在となっていた。

島津貴久の父忠良は、自ら高山に赴き、80日あまりも滞在して、婿である肝付兼続を説得し、貴久との関係修復に努めたと言われている。しかし兼続の島津氏離反の決意は固く、最後まで忠良に従うことは無かった。

失望した島津忠良は、加世田に帰る前に、娘で兼続の妻である阿南に一首の和歌を残した。

もるよとも
知らでたのまば　このもとに
旅ねはさぞな
つゆよしぐれよ

（大崎町教育委員会　内村憲和）